

◆ H27. 12. 25 発行 発行元：NPO 法人わの会 住所：府中市四谷 6 - 6 - 1 TEL/FAX：042-360-3626 ◆



国の悪政につぶされてなるものかと

“わの会”みんなで頑張っています

昨年は、国からの介護報酬がこれまでになく削減され、介護事業にとって最も厳しい年でした。特に大きな打撃を受けたのは、デイサービスりんりん、4月から約16%減収になってしまいました。

理事会（役員会）は、デイサービスを維持し続けるための検討を重ねました。スタッフからは、「私達は認知症のケアについて学び、できるだけ寄り添う介護を、またご家族の介護負担を軽減するために延長介護や、泊り介護まで行っています。これからも同じようなケアが継続できるような運営を望みます。」との意見が出され、同時にそのためには、「日曜日のデイサービスを行ない少しでも運営が安定できるように努めます。」との提案も。

法人としては、スタッフの心意気、頑張りに依拠し、8月より日曜日ディーの実施を決めて今日に至っています。地域で生きる高齢者に必要なデイサービスりんりん、ヘルパー訪問事業あいあい、障害者支援事業は国の悪政に潰されてなるものかと頑張っています。私自身は11月に難病ALSに加えて大病を患い1ヶ月も集中治療室に入院しました。幸い退院できて正月を家で迎えています。

来年は数倍の頑張りで遅れを取り返し、自分の役割をはたしていく決意です。みなさんのご支援に感謝です。

2016年1月 わの会理事長 佐々木公一



今年度を振り返って

管理者：津田久美

■ 地域との交流を目標に

平成27年度のりんりん・第2りんりんは、「地域の方に知って頂く」を目標に掲げスタートしました。その取り組みのひとつとして、「りんりん通信」を地域の皆さんに発行することにしました。

活動内容や季節に起こりうる病気の予防対策、介護に関する情報等を載せています。昨年は、近隣の方と居宅支援事業所、地域包括センターなどに2回発行することが出来ました。今後も広げていく予定です。



また、地域、家族ぐるみの行事も継続し、納涼祭、もちつき大会を今年も行うことが出来ました。今回のもちつき大会は、家族や近隣の方だけでなく、日新小学校の子供たちとお母さん方、そして先生までと想像以上のたくさんの方々に参加していただく

ことができ、とてもにぎやかな行事となりました。これまで日新小学校の6年生は自分たちで育てた菊の花をりんりに届けてくださっていました。今年はさらにもちつき大会にも参加していただき、地域とのつながりの輪が広がっています。

■ 日曜日もデイサービス始めました

8月よりりんりん・第2りんりんとも日曜日のデイサービスははじめました。

日曜のデイに関しては、ご家族から「日曜日でも利用できたら…」というお声により始めました。まだ、日曜を利用される方は少なく、1日3~4名の方の利用となっています。「用事があるときなど、利用できるから助かっている」、「今まで日曜に利用していたデイサービスが閉鎖になり、どうしようかと思っていたがりんりんを利用できることになり助かっている」などのお声を頂き、少しでもお役に立てていることはうれしい限りです。

■ 利用者さんの願いに応え

りんりんを利用されている方にガンの進行に伴い、今では歩くことはもちろん自力で立ち上がることも困難になられたKさんがいらっしゃいます。今年の9月頃から歩行が難しくなり、徐々に食欲も落ち、それに伴い体力も低下して来ました。

ご家族は、「今年一杯もつかどうか？」と主治医から言われたそうです。しかし、Kさんの願いは「出来る限り、りんりに通いたい」と言うことで、ご家族からは「とくかく、りんりんさんの話ばかりしている。りんりに通うことが気力となっている」とおっしゃって頂き、私たちは「Kさんの体調がよい時は、いつでも利用していただく。りんりに来ることがKさんの気力に繋がっているなら出来る限り支援していく」ことを話し合い対応しています。

最近では、戸外活動に参加すると疲労されるため、半日の利用のみとなってきていますが、戸外活動はKさんが一番楽しみにしていることなので、戸外だけでも参加していただけるようにしています。

昨年は、りんりん・第2りんりんともお亡くなりになられた方や入院された方、施設に入所された方などが相次ぎ、スタッフにとっては残念なことが続いていました。今Kさんとご一緒できることは、私たちの喜びとなっています。



会員さんの声

～食事会～

外に出たい気持ちはある。出て、みんなと話したい。出られれば出たいんです。だから、送迎がつくというのはとても有り難い。わの会はそれをやってくれる。

〇さんの「人生の並木道」は絶品ですね。Tさんの歌もいい。昼食会でカラオケが楽しみだったけど、今はできなくなっちゃったんだよねえ。

一人では外に出られないから、安心して外にできるとわかっていると、その日はワクワクします

ここ最近、身体が思うように動かなくなってきた。足腰も痛いし、重いものは持てなくなった。圧迫骨折なんかも怖い。病気であちこちが痛い。でも、みんなと話すと気が紛れます。

管理者 志鎌 哲

会全体の高齢化が進み、より一層、バリアフリーで送迎のある「生きがい活動」や「会員交流」などのプログラムが必要とされていると感じます。一方で、特定のプログラムだけでは参加者数が先細りになっていたり、新しい会員さんの新しいニーズにどう応えていくのか、問題もあります。

さらに、活動する場所もバリアフリーや広さが求められるのですが、この要件を満たせる場所も少ないのが現状です。

活動を支えるための場所、お金、人をどう確保してゆくかが運営上の課題です。

しかし、ここ最近の活動としては、会員の皆さんの小さな要望や困りごとにわの会が一

つ一つ応えてゆくことが、様々な支援者の輪をつなげていると感じます。「その話なら、こういうところで聞いてもらえるかもしれないですよ」「今度うちにある物をもってきましょうか」「これを役立ててください」などなど、何か一つの困りごとに取り組むと、何かしらの声が聞こえるようになっていきます。会員の皆さんの声を聞く。それを元に行動を起こす。行動を振り返りながら、また新しい声に耳を傾ける。活動を続けていくうちに、仲間が増える。地域における自立支援は、そんな小さな積み重ねの上に成り立っているのではないのでしょうか。

府中自立支援ネットワークわの会の全員が、関わっていて楽しい、面白いと感じられる会をめざして、これからも活動を続けて行きたいと思います。





管理者 志鎌 哲

重度訪問介護従業者の資格は、介護する対象は重度障害を持つ方に限られるものの、もっとも短い時間（20時間の講義と10時間の実習）で取得できる福祉の資格です。

短期間で取得できるものとはいえ、この資格は重度障害を持つ方の生活を支える仕事をするためのものです。

この研修では福祉の仕事において大切な「本人が主体となるケア」ができるようカリキュラムを組んでいます。大事にしているのは当事者の生活を知ることと、コミュニケーションについてです。

また、重度の障害に対応する医療的ケアについても、実際に使う機材を手にとって体験

しながら講義をします。有資格者ではあるが改めて学びなおしたいという方に好評を得ています。

27年度の研修は、第4回目が1月23日（土）、24日（日）となっております。皆様の参加をお待ちしています



～* 研修生の感想 *～*～*～*～*～*～*～*～*～*～*～*～*～*～*～*～

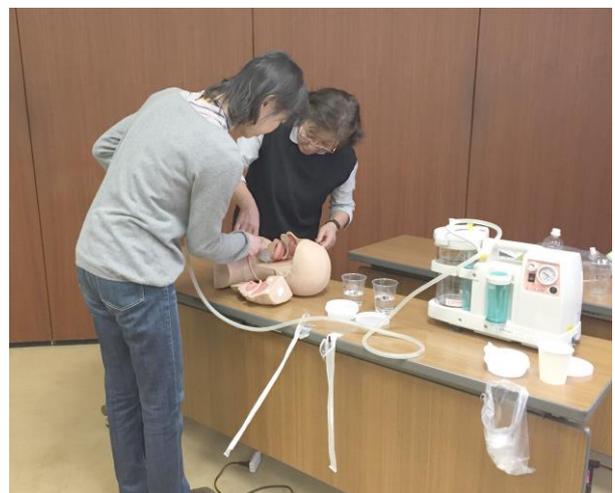
◆どんなに重度の方でも介護者主体の介護ではなく利用者主体の介護が求められているということ、それには利用者とのコミュニケーション（文字盤、表情、アイコンタクト）をしっかり受け取り介護に生かすことまた、利用者+家族の方とも信頼関係を築いていくように心がけること、それには長い時間（積み重ねの時間）と介護者のきめ細かな気遣い（見守る心、観察する目、高い技術）が大切だと感じました。また、介護・看護・マッサージ等チームワークの大切さも介護の質に大きく関わると実感しました。（主婦）

◆動けなくとも触れたとき、目が合ったときなど、この人と一緒にコミュニケーションをとっている、自分と相手が人として関わりあっているように感じ嬉しく思った
（看護学生）

◆ALS の患者さんはもっと何も出来ないものだ自分勝手に思い込んでいたけど、

佐々木さんの話を聞いてみて ALS の患者さんでも、こんなにも出来ることがあり生きる力に満ち溢れていてすごいと思った
（看護学生）

◆（学校の）授業より考えながら理解していくことが出来た。最後にキネステを実際にやるのは、慣れるまでに時間がかかりそうだと思ったけど、技術援助の不安を減らせることができ楽しいと思えることが出来た。（看護学生）





わの会相談支援



半身麻痺の A さんは、車椅子の生活となり、さらに視覚障害も進行してきました。通院や遠方への移動など長時間のヘルプに入れるヘルパー事業所が少ないことが悩みです。気分転換のため、ショッピングに安心してゆけるのが現在の望みです。

B さんは難病をかかえ、その結果手足の痺れが残り、移動は車椅子が必要な状態です。家族は遠方におり音信普通。体調は安定せず、救急車を呼ぶこともしばしばありました。車椅子を利用し、地域で療養しながらの暮らしはまったくの初めてのため、どのような制度があるか、どうやって支援を受けていくかもわからない状態から、計画相談がスタートしました

A さん、B さん。それぞれがそれぞれの人生を生き、それぞれの困難を抱えています。計画相談担当者として関わって感じる事は、現在の福祉は、困難を抱えている本人に「自己決定」を迫っていることです。「どうしたいのか、ご自分で決めてください」—しかし、苦しい、大変な状況の中、それを本人に迫るのは酷ではないでしょうか。先にあげた B さんは、どのような制度があるか、それをどうやって利用するのも分からない状況でした（ついでに言う

なら、どうして自己決定なのかといえば、結局契約とそれぞれの責任を明確にするためであり、それはどちらかといえば本人より事業者や行政の保護のためではないかとすら感じます。府中市は第 6 期総合計画において障害者の相談事業に力を入れることを掲げていますが、本人主体で無い「自己決定」にならないよう注視していく必要があります。

でも、だからこそその計画相談事業ではないかとも思うのです。計画相談の立場は、この計画を必要とする本人の「(この社会において)普通に生きる権利」を守るためにあるのではないかと。本人が、自分らしく生きるために必要な制度ですが、それをちゃんと本人が使えるようにするための手伝いが必要なことがとても多いのです。計画相談はそこを担います。

わの会相談支援事業は、現在 25 人の計画を担当するようになりました。先にあげた A さん、B さんをはじめとして、誰一人として同じ人は居ません。みんな違います。みんな違う皆さんの人生に、どう向き合いながらそのお手伝いをしてゆけるか。これからは頑張っていきたいと思います。よろしくお願ひします



ヘルパーステーションあいあい

管理者 高橋 直子

ヘルパーステーションあいあいは 11 年目を迎えました。

【平成 27 年 12 月現在の状況】

利用者 45 名

ヘルパー 64 名(うち専属 18 名)

今年度は現利用者の方の紹介からのご依頼希望が多く、4 月より今まで 7 名の方へ(児童・知的障害・視覚障害・介護保険など)新規でヘルパー派遣を開始致しました。

様々なケースをお引き受けする中で、改めて介護保険・障害者総合支援法ともに制度改



正ごとにサービスが利用しづらくなる現状。スキル不足により行き届いたサービスに至るまでに時間がかかるなど…。課題解決がサービス提供責任者の体制不備等によりスムーズにいかないことから、事業所として、いくつかの課題が明らかになりました。

来年度に向けては

- 1) 利用者・ご家族様・働いているヘルパーの「困る・困っています」等の意見や要望を迅速に受け止め、解決に向けての話し合い等を定期的開催する。
- 2) ヘルパー1人1人のスキルUPを軸とした研修や実際のケアを振り返る研修を計

画する。

- 3) 利用者ごとの担当者会議を行い、日頃感じている疑問や不安などを解決していく。

住み慣れた環境で

その方らしい在宅生活を維持していただく中



NPO 法人わの会



介護現場から

常任理事 佐々木節子

「介護離職ゼロ」が取り上げられていますが、介護の現場から言えることは、「まったく無理な話」です。

■ ヘルパー不足で

利用者の依頼に応えられず

私達のヘルパー事業所にも、新利用者さんへのヘルパー依頼が毎月のようにあります。残念ながら、八割はお断りせざるをえない状況です。対応できるヘルパーが不足しているからです。ヘルパー不足の最大の理由は賃金が安いから。他の仕事の平均よりも、介護労働の場合、10万円も安いのが現在の状況です。

コンビニで5時間働いた時の方が、月額にするとヘルパーより収入が多いと言われます。さらにヘルパーの仕事は細かい国とのルールで縛られています。例えば「家事は45分まで」「身体介護は1時間以内に」「通院介護時の院内は介護保険の適用にならない」など。さらに認知症の方の見守りや、ヘルパーと利用者さんの信頼関係を築くために必要なコミュニケーションも認められていません。次第に仕事に魅力を見いだしにくくなり、介護の仕事をやめてしまうヘルパーもいます。全国にヘルパーの有資格者は380万人もいて、その一割程しか働いていません。

わの会では今年から時給を引き上げ、処遇

で、利用者の要望が達成され支えているご家族様の気持ちにより沿いながら必要な支援をさせていただくことを目標に「出会い」と「愛」の意味を込めて名づけられた「あいあい」の名に負けないよう、今後とも地に足をつけ進んでいきたいと思えます。

改善に努めています。また、わの会は自力でヘルパー育成のための研修事業も行っていますが、十分なヘルパー確保には至っていません。

■ 施設不足

一特養は220人待ち、グループホーム空なし

「働きたい、働かなければならない」と思っても介護が必要な家族がいて、家族介護が充分でない場合は、当然施設を希望しますが、そこもすぐには入所できない状況です。満室で空がないところもありますが、この4月から国、都、市からの報酬が引き下げられ、運営が困難になり、介護職員不足から、入所希望者を受け止められないところが増えてきています。

■ 介護をしながらも働き続けられる様に

「すみなれた地域で慣れ親しんでいる人々と、老後を」と願う介護を必要とする人々がいて、できれば仕事と介護を両立できるようにと、心をいためる人々の問題が解決できるようにならなければ「介護離職ゼロ」は実現できません。

オリンピックに金をかけるように、大型開発事業に難なく何億円も予算化されるように、介護をめぐる分野にも予算増を願わずにはいられない。